

招待席

山口孤剣

やまぐちこけん 評論家、詩人、歌人 山口県生まれ。1883（明治16）年、1920（大正9）年。山口孤剣が37歳の若さで亡くなった時、堺利彦は、日本社会主義同盟の機関紙「社会主義」に寄せた追悼文で、「演説にも文章にも常に火のような気焰を吐いていた」と人物像を描いている。いわゆる「大逆事件」前後まで、この時期の社会主義運動の若い最も熱心な活動家であった。明治40年代には、平民短歌を提唱した。掲載作は、1904（明治37）年9月、「週刊平民新聞」初出。「明治文学全集83 明治社会主義文学集（一）」（1965年7月、筑摩書房刊）に拠り、収録。

戦争を呪ふ

天の星、野べの百合にも平和の、色は満てるを、醜の戦よ。

血の酒杯、舌つゞみ打つ醜人を、滅亡にさそふ天の火もがな。

バイブルを血汐に染めて、十字架を、砲にかざらん宗教家はや。

天も知れ、地も記すべし、此民は、人を屠りて人の道と云ふ。

教会のうち、はやす悪魔の讚美歌よ、戦に勝てと捧ぐ祈祷よ。

醜国の司人等よ、孤児と、寡婦が血に泣く、声を聞かずや。

戦ひの毒酒に酔へる人の子に、神の怒の鞭よ下り来ね。

Yamaguchi Koken

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Feb 26, 2009